別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　　小森　和子

本論文「中国語を第一言語とする日本語学習者の単語認知処理に関する研究－同形語の処理過程を中心に－」は，中国語を母語（以下 L1）とする，第二言語（以下 L2）としての日本語学習者を対象に，日本語と中国語で同じ漢字で表記される日本語の漢語（以下同形語）に関する一連の実験を実施し，中国語を母語とする日本語学習者の同形語の単語認知処理過程のモデル化を試みたものである．

本論文は全 7 章から成る．第 1 章は，L2 習得の単語認知処理研究に占める，本研究の位置と概要の記述に充てられる。基本概念に操作的定義を施し,「同形語」に加え，同形語に共通する意義を「共有義」，同形語のいずれかにしか認められない意義を「独自義」とし，単語認知処理過程に関わる符号として，書字，音韻，意味の情報が処理過程で変換される形式を「表象」とした．

第 2 章では，日本語教育での同形語習得研究の現状と課題を論じる．また，バイリンガルの単語認知処理研究を概観し，先行研究で提示された単語認知処理モデルの問題点を指摘した上で，以下 3 点を研究課題とする．

課題 1 は，日中共有義と日本語独自義を有する同形語（以下 O 語(1)）の認知処理における，共有義と日本語独自義の活性化の異同及び日本語習熟度との関係の解明；課題 2 は，共有義と中国語独自義を有する同形語（以下 O 語(2)）と共有義を持たない語(以下 D 語)の認知処理における，中国語独自義の活性化による処理への干渉の有無，中国語義の活性化による日本語処理への干渉の異同，及び日本語習熟度との関係の解明；課題 3 は，中国語 L1 学習者の L2 としての日本語同形語の処理過程を示す妥当なモデルの構築である．

第 3 章から 6 章では，上記課題解決を目標に，周到に計画された 8 つの実験を詳述し,結果が示唆する中国語 L1 学習者の同形語の認知処理過程を論じる．

まず，第 3 章では，2 つの実験を記述し，結果を考察する．実験 1 は，日本語の O 語(1)の単語認知処理が共有義と日本語独自義とでどのように異なるかを見るための,語彙性判断課題によるプライミング実験である.実験計画では，意義条件(共有義，日本語独自義，中立条件)を被験者内要因とし，習熟度条件(上位群，下位群)を被験者間要因とした．実験結果から，上位群は，共有義と日本語独自義両方でプライミング効果が認められ，いずれの意味的表象も迅速に活性化されるが，下位群は，共有義でも日本語独自義でも意味的表象の活性化が

認められなかったと論じる．

実験 2 は，O 語(2)の中国語の単語認知処理過程に迫ることを目的とする．実験計画，実験方法ともに実験 1 に準じる．結果から，上位群も下位群も，共有義，中国語独自義ともに，プライミング効果が認められ，L1 の中国語では，書字的表象と意味的表象が相互に活性化することが示されたと論じる．

第 4 章では,第 3 章の結果に基づいた 2 つの実験を記述し,結果を考察する．実験 3 は、実験 1 のプライム語を中国語で提示した場合のプライミング効果の有無を測ることを目的とした．実験の結果，実験 1 同様，上位群は，共有義でも日本語独自義でもプライミング効果が認められたが，下位群はいずれもプライミング効果が認められなかったことから，下位群は日本語の書字的表象と意味的表象の相互活性化が，入力と出力の双方で，迅速ではないと論じる．

実験 4 は，下位群の結果が知識不足によるものか活性化の問題かを明らかにすることを目的に，O 語(1)の共有義と日本語独自義に関する知識を，文正誤判断課題で測った．結果は，日本語独自義は，上位群が有意に正答率が高く，共有義は,上位群と下位群の間に有意差が認められないというもので,ここから,下位群は共有義に関する正しい知識を有していても活性化が迅速でないため,処理が遅延することが示されたと論じる．

第 5 章では，さらに 2 つの実験を記述し、結果を考察する．まず、実験 5 では，0 語(2)を用い，中国語独自義が日本語の処理に干渉的な影響を及ぼしているか否かを検討した結果，上位群も下位群も共に，干渉語で判断が遅延し，誤答が認められた．この結果から，下位群だけでなく上位群でも，日本語の 0 語(2)の処理において，中国語独自義が迅速に活性化し，日本語の処理に干渉することが示されたと論じる．

実験 6 は，実験 5 と同様の分析を D 語を用いて行った．その結果，D 語の場合も，O 語(2)と同様の結果が得られたとするが，実験 5 の結果との直接比較から，共有義のない O 語(2)の方が D 語より干渉が小さいと結論する．

第 6 章では，翻訳相当語を用いた補足実験 7 と 8 を記述する．これらは，実験 1 から実験 6 の結果が示唆する，同形語では中国語義の活性化が優勢であるということを確認するために行った．

実験 7 と実験 8 は,日本語と中国語で意味的表象は共有するが,書字的表象の異なる非同形語として,翻訳相当語の認知処理を測ることを目的とした.文正誤判断課題を実験方法として，ターゲット語には，文の意味に合うが書字が異なる漢字二字熟語を用いた．実験 7 では，日本語文中に中国語のターゲット語が混入された文，実験 8 ではその反対の刺激文を用いた．その結果，いずれの場合も,文の意味との適合語の干渉が有意であったとする．この結果から，翻訳相

当語では，L1 と L2 の書字的表象が意味的表象を媒介にして，相互に対称的に活性化することが示されたと論じる．

第 7 章では，以上の結果をまとめ，3 つの研究課題に回答を与える．まず，課題 1 について，同形語 O 語(1)の認知処理では、L2 としての日本語の書字的表象と意味的表象における相互活性化が L2 習熟度に依存すると結論づける。また，課題 2 について，同形語 O 語(2)と D 語の認知処理では、習熟度に関わらず，L1 語義の意味的表象が活性化し、L2 の処理過程に干渉を及ぼすことが明らかになったとし，共有義のない D 語が O 語(2)より正しく処理されやすいと結論づける．そこから課題 3 への回答として，中国語 L1 の日本語学習者による，同形語の認知処理過程モデルを提案した．最後に，さらに精緻化した実験に基づいた本研究の提示モデルの実証が今後の課題であると述べている．

以上が本論文の概要である．中国語を L1 とする日本語学習者の同形語の習得に関して，認知処理過程に焦点を当てた研究は少なく，その意味で，本研究の当該研究領域への貢献と学問的意義は大きい．とりわけ，本論文が提示する，同形語の単語認知処理過程モデルは，先行研究が提案する種々の単語認知処理モデルが扱わなかった，二言語間で意味的関係性が複雑な単語の認知処理に一定の説明を与えることができることから，バイリンガルの単語認知処理過程に新たなモデルの可能性を示唆した点に意義があり，今後の著者の研究成果が大いに期待される．

とはいえ，改善の余地が無いわけではない．審査では，本研究が提示する単語認知処理過程モデルについて，いくつかの指摘がなされた．まず，本実験から得られた単語認知処理過程モデルに基づく理想モデルが提案されているが，それが L2 習得の最終ゴールとなるのか，意味拡張と見られる共有義と独自義の習得過程に，何らかの説明を与えることが出来るか， L2 の習得過程への具体的な示唆があるか等である．また，最後に，理想的処理モデル図について，共有義の存在が及ぼす影響についてどのように説明されるか，分散型であることが適切に表現されていないのではないか，L1 から L2 への干渉に抑制リンクを想定した方が良い等、今後の改良に向けた具体的な指摘があった．

しかし，これらの指摘は，本研究の根幹を左右するようなものではなく，また，多くは著者の将来の研鑽に期すべきことがらであり，本論文の大きな学術的貢献をいささかも損なうものではない．

以上の理由により，本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する．